

## 12月5日 待降節第2主日

イザ 11:1~10    ロマ 15:4~9    マタ 3:1~12

### 1. マタ

w.7-9 「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。“我々の父はアブラハムだ” などと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを作り出すことがおできになる。」

新約聖書における“神の怒り”は、“御国”“栄光”“命”などと同様に、終末的な概念です。イエス・キリストの到来によって、この終末の時が始まったので(12:28、マコ 1:15 参照)、聖書を学ぶ人は信仰の目を通してこれを見ることを迫られるのです。

世間では不幸や災難が重なると、神々の怒りによる災いから逃れるために、いわゆる“お祓い”をする慣習がありますが、終末的な神の怒りは“免れることが不可能である”と、洗礼者ヨハネは説教しました。ですから私たちは新約聖書を、“叱られないようによい子になりましょう”というレベルで理解してはなりません。

「正しい者はいない。一人もない」(ロマ 3:10)、私たちは皆「生まれながら神の怒りを受けるべき者」(エフェ 2:3)であることを、待降節第2主日の福音朗読は宣言します。やがて来られる方であるキリストは、「生者と死者を裁く」(信条)審判者であり(25:31 以下、II テモ 4:1,8 参照)、私たちは皆、その裁きの座の前に立つのです(ロマ 14:10、I ペト 4:5)。

「悔い改めにふさわしい実を結べ」とは、外ならぬ御子イエスの“十字架の死と勝利の復活”に結ばれて、罪の赦しを受けること以外ではあり得ません(ロマ 6:3-11、使 10:43、エフェ 1:7)。私たちは洗礼者の説教を聞きながら、キリストの十字架こそがまさに神の怒りそのものであったことを、深く黙想しましょう(マコ 15:34、I ペト 2:22-25 参照)。

### 2. ロマ

御子イエスが十字架の苦難を通して忍ばれた「忍耐」と、その苦しみを通して私たちに与えてくださった「慰め」によって、私たちキリスト者は“からだの復活と永遠のいのち”の希望を持ち続けることが出来るのです(w.4-5)。

キリスト教信仰は“旅人の信仰”(ヘブ 11:13-16)であることを、私たちは毎年、典礼暦のこの期節に思い起こします。「わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。」(フィリ 3:20) 「共に(神の国の)恵みにあずかる者」(フィリ 1:7)の集まりである教会は、この「慰め」によって支えられ、導かれているのです(II コリ 1:3-7)。

今日の“エキュメニズム(教会一致)”の実態を、ある人は本来の目標からの逸脱であると非難しますが、

今朝ともにミサをささげているカトリックの子らは、おのこの自らの環境の中で、「あなたがたも互いに相手を受け入れなさい」(v.7)という使徒パウロの言葉を考えてみましょう。私たちは今朝、「神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださった」ということを、再び思い起こしているのです。

### 3. イザ

預言者イザヤは、シリア・エフライム戦争に際して王アハズに対して、“落ち着いて、静かにしていなさい。恐れることはない。……信じなければ、あなたがたは確かにされない”と警告しました(7章)。しかし、王は全く聞く耳を持ちませんでした(王下16章)。地上の王に失望したイザヤは、今や天的なメシアの待望をもって、それに置き換えました。

エッサイはダビデの父であり、私たちはここに“ダビデの子であるメシア”預言の萌芽を見出します。待降節の各主日の朗読配分を通して、私たちは毎年、“共観福音書の支配的な主題は神の国である”ことを再認識するのですが、それは全く終末的な概念であることを強調しなければなりません。

「その日が来れば……」(v.10)。教会が、“神の栄光に与る希望を誇りにしている”(ロマ5:2)のであれば、主の御言葉は私たちの道の光、私たちの歩みを照らす灯です。「だから、目を覚ましていなさい。……だから、あなたがたも用意していなさい。」(マタ24:42-44)

アーメン、ハレルヤ。

## 12月12日 待降節第3主日

イザ 35:1～10 ヤコ 5:7～10 マタ 11:2～11

### 1. マタ

v.3 「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」

イスラエルは「来るべき方」を待ち望む民でありました。私たちの主イエス・キリストは、旧約の民が待望していた約束のメシアであります(使 3:18-26、1ペト 1:10-12)。このイエス・キリストの到来によって、今や時は満ちて神の国は近づき(マコ 1:15)、終末的な神の支配である贖い、すなわち罪と死からの救いが開始されました(エフェ 1:7-14)。

待降節第3主日の福音朗読の中で、イエスは洗礼者ヨハネについて証しておられます。

vv.9-10 「預言者か。そうだ。言うておく。預言者以上の者である。“見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの前に道を準備させよう”と書いてあるのは、この人のことだ。」

牢の中のヨハネが、いかに弱く、心迷っていたとしても、彼は神が遣わされたエリヤであり(マラ 3:23)、時は満ち、約束のメシアはすでにその第一の来臨を果たして、ここに来ておられました。イエスが、ヨハネの宣教と御自分の活動を“時のしるし”(16:1-4、ルカ 12:54-56)として理解しておられたことを、今朝の福音は明確に伝えています。v.5はイザ 35:5-6と61:1の実現を指しています。そして言われました。「聞く耳のある者は聞きなさい」(11:15、マコ 4:9)。

すべてのキリスト者は今、この終末の時のしるしを確かに見る信仰によって、典礼暦の新しい年を歩み始めています。いや、そうでありたいと願います。教会のクリスマスは、私たちが待ち望むキリストの第二の来臨から切り離された、ただの Märchen(おとぎ話)では決してないからです。

### 2. ヤコ

v.10 「兄弟たち、主の名によって語った(旧約の)預言者たちを、辛抱と忍耐の模範としなさい。」

旧約聖書の預言者たちの書に親しんで、彼らの信仰と希望に共感するという体験が、どれほど多くのキリスト者の歩みを支えて来たことでしょうか。「この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを(未だ)手に入れませんでした。はるかにそれを見て喜びの声を上げ……。」(ヘブ 11:13) この約束の実現である神の国への信仰の“創始者また完成者”は、私たちの主イエス・キリストです(ヘブ 12:2)。

私たちキリスト者は、自分の信仰が“神の約束への信仰”、“約束を実現してくださるイエス・キリストへの信仰”以外ではあり得ないことを、今年もこの期節に再確認しましょう。私たちの教会の信仰、教会が公に言い表している希望(ヘブ 10:23)とは、「罪の赦しをもたらず唯一の洗礼を認め、死者の復活と来世のいのちを待ち望みます」だからです(ニケア・コンスタンチノーブル信条)。

### 3. イザ

恐らくイザヤのこの預言は、アッシリアの王センナケリブが敗退した頃(王下 19 章)に語られたものであろうと推測されます。現代の教会は今、その預言の実現する日に大きく近づいて、イエス・キリストの第二の来臨を待っています。

私たちは預言者イザヤの当時の信仰に思いを馳せて、心を励まされるのです。「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、(未だ)見えない事実を確認することです。昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。」(ヘブ 11:1-2)

v.10 「主に贖われた人々は帰って来る。とこしえの喜びを先頭に立てて、喜び歌いつつ(天の)シオンに帰り着く。喜びと楽しみが彼らを迎え、嘆きと悲しみは逃げ去る。」

やがて来られる方は、かつておられ、今おられるのと同じキリストであることを感謝しましょう。そのようなキリストの第一の来臨を追憶する祭典として、私たちは今年も主の降誕の祭りを共に祝います。

ハレルヤ、アーメン。

## 12月19日 待降節第4主日

イザ 7:10～14    ロマ 1:1～7    マタ 1:18～24

### 1. マタ

v.21 「その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」

今朝の福音の朗読を、神がその御子によって与えてくださった贖いの恵みと御国の希望に、私たちが直ちに結びつけて聞くのでなければ、それは美しいおとぎ話、あるいは不思議な昔話の一節にしか過ぎないものになってしまいます。実際、教会の内と外を問わず、降誕の物語りはそのようなもの、私たちの救いとは何の関係もないものとして、人々の側らを流れ過ぎて行きます。

「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。」(ガラ 4:4) 実に、神が、神御自身が、マリアの胎に御子を宿らせて、「わたしたちの罪を償うけにえとして、御子をお遣わしになりました。」(ヨハ 4:10) このようにして、御子が“聖霊によって、おとめマリアよりからだを受け、人となられました”という、ニケア・コンスタンチノーブル信条の宣言を、教会は今年もこの期節に感謝と喜びをもって唱和します。

教会の典礼は、そこで神のことばすなわちキリストの福音が語られ、聞かれるための奉仕の場であると言えることができます。この奉仕(Gottesdienst)は学者や教導職の役目であって、信者はただ盲従していればよいなどという時代がかつてあったというのは全くの嘘で、歴史の教会はいつの時代にもただキリストの福音によって、福音への信仰によって救いを得て来ました。

v.24 「ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ……」

神のことばを聞く者だけが、また神のことばに服従することが出来るのです。降誕の物語りの主役はマリアでもヨセフでもありません。父なる神が聖霊によって御子イエス・キリストをお遣わしになりました。ですからクリスマスの祭典の主役は、父・子・聖霊なる三位一体の神です。私たち一同は、「キリストに結ばれて、新しく創造された者」(II コリ 5:17)として、今年も降誕の祭典を迎えるのです。

### 2. ロマ

v.4 「聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。」

御子は“聖霊によって、おとめマリアよりからだを受け、人となられ”(ニケア・コンスタンチノーブル信条)、ヨルダン川でのヨハネからの洗礼において、聖霊によって油注がれてメシアとしての歩みを始められました。しかし、使徒たちと原始教会の人々に聖霊が降るようになったのは、御子の復活後のことでした(使 1:8 参照)。

御子イエスが聖霊によっておとめマリアよりからだを受けて人となられたように、今や力ある神の子イエ

スは、私たち洗礼の秘蹟に与る者を聖霊によって新しい命に生かして下さいます(6:3-11, 8:9-11)。私たちキリスト者は“肉の支配下にある者”ではなくて“霊の支配下にいる者”(8:8-9)とされ、“本国は天にあり”(フィリ3:20-21)、“与えられた命は、キリストと共に神の内に隠されている者”(コロ3:1-4)なのです。「信仰の従順」(v.5)とは、“この福音、すなわち神の秘められた計画”(15:25)への信仰の従順以外の何ものでもあり得ないことを、理解しましょう。

### 3. イザ

私たちは A.D.すなわち anno Domini(主の御代)に生きているのです。それは、“わたしたちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んでいます”(主の祈り／副文)という時代です。その“しるし”を、今朝の朗読聖書から聞き取ることの出来る人は幸いです。

多くの方が、敬虔ではあるけれども、福音に対する信仰的な優柔不断によって、実際には“神にもどかしい思いをさせている”のです。アハズ王は「(畏れおおくも)わたしは求めない。主を試すようなことはしない」と、イザヤに答えました。そして、預言者が受けた失望は、それ以上に、神御自身の失望であったことを思うとき、私たちの心は痛みます。

にもかかわらず、そうです、それにもかかわらず、「神はわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」(イヨハ4:10) 主が預言者を通して言われていたことは、実現したのです(マタ1:22)。

「わたしたちが、……(今年も)降誕祭をふさわしく祝うことが出来ますように。」(今朝の拝領祈願)

ハレルヤ、アーメン。

## 12月25日 主の降誕／日中のミサ

イザ 52:7～10 ヘブ 1:1～6 ヨハ 1:1～18

### 1. ヨハ

v.14 「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」

主の降誕のミサの第一の目的は、神のことばを聞くことです。それは使徒たちが宣教した“キリストの福音”(Iコリ15:1)のことで、ロマ10:8,17で“言葉(ῥήμα)”と訳されているものです。それに対して、“御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた”(ヘブ9:12)御子キリストを、ヨハネ福音書はここで“言(λόγος)”と書きました。それは“罪の赦しを得させる”(ルカ24:47)勝利者キリスト御自身ですから(Iヨハ5:4-5)、また“神の言葉(ο λόγος του Θεου)”とも呼ばれています(黙19:11-16)。

この方が「僕の身分になり、人間と同じ者になられ」(フィリ2:7)、わたしたち(人間)の間に宿られたという福音を、私たちは使徒たちの宣教を通して聞くのです。この“宿る”とは、黙7:15の“幕屋を張る”と訳されているのと同じ言葉です。それは、かつて荒れ野のイスラエルのただ中に幕屋があり、「雲は臨在の幕屋を覆い、主の栄光が幕屋に満ちた」(出40:34)と書かれていることに由来しています。

教会はこの“神のことば”、“キリストの福音”という土台の上に建っています。それは私たちの主義や思想などというものではなくて、使徒たちを通して告げ知らされた(Iコリ15:1-2、ガラ1:8)“神の啓示”であって、「ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力」(ロマ1:16)なのです。

“啓示は神御自身である”ということ、歴史の教会はこれまでも、折にふれて再確認する機会を持って来ました。そして今も、現代の教会はその必要に迫られています。外の世界ではなくて教会自身が、神のことばに聞くことよりも、人間にとって可能な改善や改革に、豊かで平和な世界という幻想に、極めて独断的に関心を向けているからです。しかし、“神の言葉”は“勝利の上に更に勝利を得ようと出て行った”(黙6:2)という、神の子の第一の来臨を証しする使徒の宣教にこそ、私たちは耳を傾けようではありませんか。

### 2. ヘブ

v.3 「御子は …… 人々の罪を清められた後、天の高いところにおられる大いなる方の右の座にお着きになりました。」

キリスト教会にとって宣教とは、使徒たちの宣教の継続以外ではあり得ないことを、多くの人たちが忘れて見受けられます。福音の宣教が意味するものはもともと終末的な使信であって、神が約束しておられた救いが、時が満ちて到来したということの“しるし”なのです(マタ10:7、ロマ13:11-12)。キリストがすでに「御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた」(9:12)という使徒の証しの上にだけ、今日の教会はその宣教の唯一の土台を置くことが出来るのです(Iコリ3:10)。

降誕祭の主演は、飼い葉桶に寝かされた“思い出の乳飲み子イエス”ではなくて、「二度目には、罪を負うためではなくて、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださる」(9:28)キリストです。本当に神のことばを聞く者だけが、また本当にその日を「忍耐して待ち望む」(ロマ8:25)ことが出来るのです。

### 3. イザ

v.7 「いかに美しいことか、山々を行き巡り、良い知らせを伝える者の足は。」

イザ51:9-52:12というまとまりの中で、今朝の朗読部分を理解しましょう。今や近づきつつある御国の到来の福音を聞くべく「奮い立て」(51:9, 52:1)と、私たちは今朝のミサで呼びかけられているのです。

v.10 「地の果てまで、すべての人が、わたしたちの神の救いを仰ぐ。」

すべての教会の降誕祭のミサが、人の言葉ではなくて、神のことばを聞く喜びの祭典でありますように。

ハレルヤ、アーメン。



## 12月26日 聖家族

シラ 3:2-6,12-14 コロ 3:12~21 マタ 2:13~23

### 1. マタ

神が私たちに“聖家族を模範として与えてくださった、そして私たちがその聖家族にならう”とは、どういう意味かを知るために、改めて今朝の公式祈願に注目しましょう。集会祈願で祈った「あなたの家の永遠の喜びに与ることが出来ますように」が、再び拝領祈願で「生活の労苦を乗り越えて、ともに永遠の喜びに入ることが出来ますように」と繰り返されています。

主の約束が実現し、やがてキリストと共に神の国を受け継ぐという“目標”と、そこに至る“手段”としての教えを区別して理解することが、ここでは大切になります。なぜなら現実には、しばしば目標と手段が混同されてしまうことが多いからです。

今朝の福音書の物語りでも、その主役は神であって、決してヨセフでもその家族でもないのです。ただの天使ではなくて、“主の天使”がヨセフに命令し(vv.13,19)、ヨセフは“直ちに起きて”(vv.14,21)その命令に従いました。聖家族の服従は、主の秘められた計画が実現するためでありました。私たちはそれを彼らの美徳のように考えて、いささかも自らの徳の手本にしようなどと思ってはなりません。

御子の第一の来臨を追憶する私たち教会は、この聖家族の祝日に、「み国が来ますように、みこころが天に行われるとおり地にも行われますように」と祈ることが、どれほど大切であるかを学びます。

### 2. コロ

v.12 「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、……」

これは、今朝の朗読テキストの前提なのですが、しばしば人は“だから……しなさい”と書かれていることだけに注目しがちです。“……のですから”という目的が見落とされると、それに代わって多様な各種手段、ときには些細な手段までもが、まるで目的そのものであるかのように受け取られてしまいます。

今朝の朗読テキストだけを切り離して取り上げ、コロサイの信徒への手紙全体を読むことをしない人は、聖書を知らない人、神のことばを聞くことの出来ない人でしかありません。「キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい」(v.16)とはどういう意味かを知るには、「神の秘められた計画であるキリストを悟る」(2:2)ことが前提になっていることを理解する必要があります。そして更に、その「秘められた計画」を具体的に説明している エフェ 3:1-11 を参照すると、初めて「赦し合いなさい」「愛を身につけなさい」「キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい」(vv13-15)と勧められている理由が分かって来ます。

カトリック教会だけでなく、キリスト教諸派それぞれが、昔も今もいろいろな道徳を強調して教えて来ました。そしてしばしば、あたかも道徳そのものが目的化してしまって、“主の約束が実現し、やがてキリストと共に神の国を受け継ぐ”という本来の“目標”が、見失われて来ました。

キリストの福音が、そして神の秘められた計画が正しく理解されて、「神をほめたたえなさい」(v.16)「父である神に感謝しなさい」(v.17)という勧めの言葉が信者の喜びとなるために、この“聖書の学び”がささやかな奉仕として、主に用いていただけますように。

### 3. シラ

なんと温かい、親子関係に関する勧めの言葉であることか……と、だれもが感じることでしょう。“共に神の国を受け継ぐ”という“目標”が共有されているところでだけ、このシラ書のテキストを通して神のことは語られるのです。その第一の場が“ミサ”であることを、どうか理解していただきたい。

マタ 11:28 の“休ませてあげよう(I will give you rest)”からレストラン(restaurant)という名称が誕生しましたが、食堂を経営することが教会の“目標”ではないことを、あなたは理解出来ることでしょう。しかし、マコ 10:14 の「子供たちをわたしのところに来させなさい」から教会は幼児教育を推進し、マタ 25:36 の「病気のときに見舞い」から医療事業が、同じく「牢にいたときに訪ね」から刑務所における教誨事業が動機付けを得て来たことに、従来だれも異論を唱えませんでした。すべて世のため人のためになる良い事だったからです。

しかし、これらすべては“手段”であって、教会の“目標”ではないのです。今朝私たちが祝っている聖家族は、ただ一つのこと、「主が預言者を通して言われていたことが実現するため」(マタ 2:15)に歩みました。今日の祝日のミサをささげる現代の教会が、そして信者一人一人が、この“聖家族の模範にならい、生活の苦勞を乗り越えて、ともに永遠の喜びに入ることができますように。”(今朝の拝領祈願)

ハレルヤ、アーメン。